

海外だより  
ドイツ留学体験記(3)

木 村 理

胃 と 腸

第27巻 第11号 別刷  
1992年11月25日 発行

*Stomach and Intestine (Tokyo) Vol. 27 No. 12 1992 IGAKU-SHOIN Tokyo Japan*

医学書院

## ドイツ留学体験記(3)

東京大学第1外科

木村 理

## 儉約(Sparsamkeit)

1991年5月中旬、ニューオーリンズで開催されたAGA(アメリカ消化器病学会)での発表を兼ねて、Mössner教授を含むMedizinische Poliklinikのドイツ人医師4人とアメリカを旅行する機会に恵まれた。フランクフルトからマイアミに飛び、NASAのスペースシャトル打ち上げ場、オーランドのWalt Disney Landを見、メキシコ湾で泳いでからニューオーリンズへ向かい、学会が終わった後はKey Westまで足を延ばす、しめて13日間の旅行である。

この旅行では、ドイツ人のいろいろな生活態度を目の当たりにすることができ、またお互いの信頼感も増し、大変に有意義な体験となった。中でも印象的だったのはドイツ人の儉約的態度である。ドイツ人は儉約ということ非常に重要視するわけで、既にこちらに来てから、何度も見てきたことではあったが、アメリカ旅行では、はっきり言って度肝を抜かれたというのが本当のところである。

マイアミで投宿したホテルは、5人で2部屋を取ったのだが、うさぎの糞の臭いのするところで、クーラーからは、ほこりと暑い空気しか出てこず、もし時差で眠くなっていなかったら、そして酒を飲んでいなかったら、とても眠れたものではなかった。ちなみに1泊の料金は1人15ドルである。



アメリカ旅行中のMössner教授(左)、Dr. Fischbach(右)と筆者。

また、ニューオーリンズで学会期間中5泊したホテルは、中心から少し離れたモーテルのようなところで、5人で1部屋(彼ら4人の身長はそれぞれ2m, 1.96m, 1.93m, 1.86mである)、ダブルベッドが2つと補助ベッド1つ、それだけで部屋がいっぱいになり、足の踏み場もないほどであった。シャワーの時間は1人5分以内だ、などと言われ、少し呆れていると、日本では教授と同じダブルベッドで寝ることがあるか、などと冗談交じりに質問してくる。このときばかりは、中心部の名のあるホテルのシングルルームに1泊140~160ドルで泊まっている日本人医師たちが羨ましくなった。私たちはと言えば、5人で1泊106ドルであった。

ドイツ人の儉約もここに極まれり、といったところであるが、この話を聞いたほかのドイツ人たちも一様に大笑いするぐらいだから、少し極端な例かもしれない。このアメリカ旅行は、一事が万事この調子であった。それでも、あるいはそれだからこそ楽しく、印象に残ることも山ほどあった。逆に、学会期間中の短い時間しかゆったりできず、そこでたくさんお金を使って、さっと日本に戻っていく日本人を見ていると、本当の豊かさとは何かについて、深く考えさせられてしまった。

## 日本のhigh technology

日本のhigh technologyはドイツにも鳴り響いている。日本製カメラやオーディオ製品は街に氾濫し、日本車もよく見かける。内視鏡はオリンパスが市場を独占している。“Das ist Sony”と言えば、「それは非常に優れたものですね」という意味である。

あるドイツ国内学会に出席した後でキールから帰る途中、ハンブルグ近くのアウトバーンで、ヒッチハイク中の青年を乗せた。彼は旧東ドイツの出身で、Berlinの壁が壊れる以前に反政府活動をしていて捕まり、2年間の監獄生活の後、旧西ドイツの政府に買われて西側に来たということであった。戦後の日本の経済的な成功を非常に尊敬しており、私が、日本から来ていて医学を学んでいる、と話すと、びっくりして「私はまた日本のhigh technologyをドイツに教えに来ているのかと思った」と言っていた。

アメリカ旅行中、マイアミでMössner教授らと日本のビールを飲んでいるときにその話になった。「確かに、日本のhigh technologyは素晴らしい。カメラもいい、車もいい、内視鏡もSonyもいい」と、教授は日本の技術力を持ち上げた。そして、こう付け加えた。「ただ、ビールを作るのだけはやめてくれ！」